「善いサマリア人」（ルカによる福音書一〇章二五～三七節）

1　イエスへの問い

今日の聖書箇所は、いわゆる「善いサマリア人」の譬え、聖書の中でももっとも有名なイエスの教えの一つです。

皆さんも、大体分かっています、というようなところではないかと思います。聖書を説き明かす側の私どもも、一度ならず取り組み、語ってきたものでもあります。ただ今回、ルカによる福音書を続けて読んでいて、これまでとは少し違って見えているところもあります。

その一つは前後関係です。前後といっても、いまは前との関係です。私どもは、ルカ一〇章に入って、七十二人の弟子の宣教への派遣、そしてイエスのもとへの帰還と見てきました。

その中で、明らかになったのは、神の国の福音が知恵ある者・賢い者には隠され幼子のような者に示されたこと、イエスの弟子たちが、かつて預言者や王も見ることのできなかったものを見ることを許されたということでした。そこには、人間の常識とは逆の事態が起こっていたのです。

さてこの福音、それでは、律法学者、「律法の専門家」といわれる人には、隠されず示されたのでしょうか、彼らはこれを受け入れたのでしょうか。これが前の段落との関係で生じてくる問いです。結論的に言えば、律法学者たちには、やはり受け入れられなかった、むしろ対立が、敵対が、これから先、もっと激しくなる、それを暗示するのが、今日の箇所でもあります。

ところでこの律法学者、律法の専門家とは、律法、つまり旧約聖書に伝えられてきた掟のことです、これの解釈と適用を専門とする人たちのことをいいます。彼らは律法を詳しく学んで、解釈を施し、民の宗教とその生活に大きな影響を与えていたのです。ユダヤ教の聖職者ではなく、信徒（レイマン）です。

ただし彼らの解釈が、字句にとらわれ、ときに煩瑣で、律法に表されている、本来の神の意志をおおいかくすようなものとなり、イエスの厳しい攻撃を受けるようになったことは、ご承知の通りです。今日の箇所で対立のきっかけをつくったのは、律法学者のほうです。

> すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」。イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」（二五～二八節）。

このところでイエスの反問に律法学者が答えて言った言葉、くり返せば、「心を尽

くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」、簡単にいえば〈神を愛し、隣人を愛する〉、この組み合わせの言い回しは、じつは旧約聖書には出てきません。

〈主なる神を愛しなさい〉、これは申命記六章（四～五節）、イスラエルの民が、朝夕唱えていた「シェマー・イスラエル」（聞け、イスラエルよ、という意味）ではじまる告白にある言葉です。全身全霊をもって主なる神を愛する、おそらくイエスにとってそれだけで答えとしては十分だったのです。ところが律法学者は、それに、レビ記（一九・一八）から、〈隣人を愛しなさい〉を引用し、それを付け加えてイエスへの答えとしたのです。

ちょっと分かりにくいことを言っていますけれど、つまりイエスにとって〈神を愛する〉だけで十分、〈隣人を愛する〉ことはそこに含まれている、含まれていなければならない。しかし律法学者は、それを分かった上で、わざわざ〈隣人を愛する〉という言葉を、付け加えたのです。こうして律法学者は、「隣人」という言葉を、いわば際立たせ、それを巡ってイエスに対し論争をふっかけた、イエスを試した、まずはそのことを抑えておきたいと思います。

2　善いサマリア人の譬え

〈神を愛せ〉と〈隣人を愛せ〉、この二つがワンセットになっている箇所は旧約聖書にはないと申し上げました。

ただ、これが正しい理解であることは、イエスご自身が、ここではっきり認めておられます。その上でイエスは隣人愛の「実行」を求めておられます。「それを実行しなさい」の「それ」とは、律法学者が付加した部分、つまり〈隣人を愛しなさい〉を指します。

イエスにとって一番の問題は、律法学者がどこまで本気で言ったかは別としても、永遠の命を受け継ぐことでした。律法学者もそう言ってイエスに近づいてきた。それなら実際に行うこと、どんな人も自分と同じように愛すること（レビ一九・三四）、それが永遠の命にいたる道だとイエスは言っているわけです。

実行を迫られた律法学者は、困ったのでしょうか、それともイエスを、自分たちに有利な議論の中に誘い出したと考えたのでしょうか。「では、わたしの隣人とはだれですか」と、用意していたかのようにイエスに再質問します。イエスをうまく誘導しえたと考えたのでしょう。というのも、隣人を愛するとは同胞を愛することであって、他の民族の人は隣人愛の対象ではないと一般に考えられていたからです。しかし、イエスのこれまでの振る舞いからして、まさにこの隣人愛の命令に彼は背いている。例えば私どもは、九章で、イエスがサマリアの村に入って、宣教しようとしたことを聞いています。律法学者は、隣人愛の問題でイエスを追い詰め、やり込めることができると考えていたようです。問題は隣人愛の問題に絞られてきました。そこでイエスが語られたのが有名な「善いサマリア人」の譬えです。

譬えそのものは、大体お分かりのことと思いますので、私の言葉で、要点を申し述べたいと思います。

ある人が、強盗に襲われ、半殺しにされ、道に放置されていたのです。そこに、次

々に三人の人が通りかかります。しかし最初の二人は、だれかが倒れていることは気がついたのですが、助けることをせず、そのまま通り過ぎてしまいます。三番目に来た人が、倒れていた人を助け、近くの宿屋まで連れて行って介抱し、その費用まで出したというのです。これがあらましです。

これだけでも、良いことをした人はだれか、明らかです。そしてそれが〈サマリア人〉でした。

良いことをしたのがサマリア人だった、これは、「わたしの隣人とはだれか」という問いを出した律法学者にとって余り面白くないことでした。というのも、ユダヤ人にとって、サマリア人は、同胞ではない、外国人にも等しい、日頃から付き合いをしない人たちだったからです。

もう一つ面白くないことは、助けることをせず、通り過ぎた二人が、エルサレム神殿の関係者であったことです。

一人は祭司、一人はレビ人、両方ともエルサレムの神殿で仕事をしている、神に仕える人たちです。とくに祭司は、エルサレムでの務めがないときには、律法の専門家として仕事をしていた、祭司は、その意味で、律法の専門家とはまさに同僚だったのです。イエスの話は、オレのことを、当てつけて言っていると、律法学者にも分かったはずです。

ただ祭司の場合、一般に、死体に触れて、身を汚すことを禁じられていました。倒れていた人を見過ごして行ってしまった、しかし死体の可能性もあるわけですから理由にはなります。しかしいまエルサレムからの帰りです。務めは終えていて、それでも、そこまで気をつけなければならないことであったのか、それは分かりません。ここが危険な街道であることは、よく知られていました。いずれにせよ祭司は「その人を見ると、道の向こう側を通って行った」（三一節）。一度は見た。しかし道の反対側を通って行ってしまいました。

さて三番目に来たのはサマリア人です。彼は「旅をしていた」（三三節）とありますが、一人の旅商人です。

そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに載せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。「この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います」（三三～三五節）。

彼は特別のことをしたわけではありません。そのとき求められていることを当たり前のように行っています。「自分のろばに乗せ」というのは、自分がろばから下りてということです。もう一頭は、荷物を運ぶためのろばです。宿屋の主人にも特別多くお金を払ったわけではありません。二日分の宿賃です。この人の心情を暗示しているのが「憐れに思い」です。これはこの後触れたいと思います。

3　憐れみ深くあること

さて最後に、いよいよイエスと律法学者とのあいだのやりとりに、一つの結論がくだされます。

「さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか」。律法の専門家は言った。「その人を助けた人です」。そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい」（三六～三七節）。

何より注目しなければならないのは、律法学者の最初の問いと、イエスの答えとのあいだのズレ、かみ合っていないところです。

律法学者は「わたしの隣人とはだれですか」と尋ねたのです。それに対するイエスの答えは「だれが・・・隣人になったと思うか」というものでした。律法学者にとって、隣人とはだれか、それは決まっていること。この人は隣人、ここから先はそうではない。そこに境界線があり、区別があるのです。そしてユダヤ人である律法学者にとって、サマリア人は隣人ではありませんでした。

「だれが・・・隣人になった」と思うかというイエスの問いは、この律法学者にとって、自らの主張が前提していること、つまり区別、境界線がある、という前提そのものに向けられた問いでした。イエスにとって、隣人は、隣人に〈なる〉という仕方で隣人で〈ある〉のです。そこに区別も境界線もありません。可能性として、みな隣人になりえます。

イエスの問いに、律法学者も、瀕死の「その人を助けた人」ですと、答えざるをえませんでした。「サマリア人」と口に出して言えなかったことは、いまはそのままにしておきましょう。

ところで「その人を助けた人」、これは直訳すれば「憐れみをおこなった人」となります。「憐れみ」と言う言葉がここに入っています。サマリア人の行いの動機を示す言葉でもあります。

すでにこのルカで、憐れみというこの言葉が、重要な言葉として何回も使われているのを知っています。「平地の説教」が一番はっきりしています。「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」（六・三六）。この憐れみが、ユダヤ人でないサマリア人を動かしたのです。

この善いサマリア人の譬え、しばしば、「する」こと、行為、行いが、求められているのだと理解されます。イエスの最後の言葉がそれを示しています。「行って、あなたも同じようにしなさい」。しかしただ行為ということでないのは言うまでもありません。憐れみの行為です。憐れみ深いのは、第一に神です。この神の憐れみを受けて、私どももはじめて憐れみ深くなることが許され、そのようになり、そのようであることが期待されます。

はじめに、これは少し推測を含む言い方で、イエスが律法学者に期待した答えは〈全身全霊をもって神を愛する〉だけでよかった、律法学者が付け加えた〈隣人を愛しなさい〉は、神を愛するに含まれているのだから、と申しました。私どもが神の憐れみを、赦しを、恵みを、心深く受けとったときに、受けとっているときに、私どもも憐れみ深くあることができるのです。そこへと私どもを動かす聖霊の力が働いてくださるからにほかなりなません。

（二〇二一・一〇・二四）